

青年画家岩下哲士氏についての一考察

若元澄男
(1998年11月26日受理)

A Consideration of a Young Artist, Iwashita Tetushi

Sumio WAKAMOTO

Abstract. This article, based upon a case study of a young artist, Iwashita Tetsushi, primarily refers to the following two things. First, it is to confirm that his way of life and belief has the most significant role in backing up "A Recommendation of 3-H Art Education", which represents his present and probably lifetime proposition. Second, it is to prove the effectiveness and feasibility of utilizing his artistic works as learning materials in art education. Ultimately, it is hoped that this study will contribute a fresh insight to reforming the distorted present art education in Japan.

I はじめに

本小稿では青年画家岩下氏の事例に依拠しつつ、主として次の二つのことに言及してみたいと考えている。第1は、岩下氏の在り方・生き方が筆者の現下の主張、そして、おそらくは終生の主張になるであろう「3H美術教育のススメ」の裏付け的な意味を持つ最も有力な事例であることを確認することである。第2は、岩下氏の作品を引用しつつ、美術教育の中における学習材としての有効性と可能性についての検討である。

II 岩下哲士氏の事例に関する学生の反応

次に列举したフレーズは学生達が詠んだものである。1998(平成10)年度前期の図画工作科教育法(小学校教員養成課程必修)の授業において、岩下氏の作品の一部をTPで、日常生活の一部をビデオ映像¹⁾で紹介し、それらの視聴を通して、感じたこと、考えたことをまとめさせたものである。総数は300余件と多数であり、もとよりすべてを紹介することはできない。したがって、主観的ではあるが学生達の印象をおおむね代表かつ象徴すると思われるものを抽出して紹介する。

- 1 スバラシイ
よい絵は心に グッとくる
- 2 自由だな
用紙いっぱい うらやましい
- 3 みる人の
心にしみる やさしい絵
- 4 僕は好き
とても優しい 何か好き
- 5 のびのびと
描くよろこび 観る心
- 6 すばらしい
か(描)くこと 見ること 生きること
- 7 うらやまし
自分らしさを 持っている
- 8 父母の
菩薩の心を 描く筆
- 9 するどい手
するどい心 まあいい絵
- 10 ほとけさま
わたしもすきに なりました
- 11 わたしには
てっちゃん自身が ほとけさま
- 12 下手上手
心がホワッと あたたかい

- 13 やさしさと
あふれる夢に パツとした
- 14 てっちゃんも
まわりの愛で 夢つかむ
- 15 すごいです
感動しました 泣きました
- 16 すごいよね
生きているって すばらしい
- 17 すごいねと
一言だけで 片付かない
- 18 にんげんは
一人ひとりが ちがうもの
- 19 てっちゃんに
生きる力を 与えられ
- 20 彼を見て
考えてみた 我のこと
- 21 ありがとう
わたしに希望と 発見を
- 22 てっちゃんと
きやすく呼べない 大きな人

さて、同様の授業をここ数年来実施してきたが、例年、異口同音、大同小異の反応を得ることが出来る。おおよそ、美術そのものの再発見、表現の意味の確認、絵の面白さの再認識、美術に取り組む姿勢への気付き、観ることの意味の確認、岩下哲士氏の絵そのものへの賞賛などが詠まれている。のみならず、岩下氏（てっちゃん）の在り方・生き方の賛美から演繹的・帰納的に自らのその見直し、人の尊厳に関する再認識、あるいは、自己理解、他者理解という人間理解に連鎖する場合もある。ご両親と岩下氏の見取り、人格形成への環境要件に言及したものまでもある。このように学生達の反応の内容は多岐にわたるが、なんらかの衝撃、少なからぬ感動、そして有形・無形の影響を受けていることが推察される。こうした反応は、この事例が学習材としても極めて大きな可能性をもっていることを予感させる。

III 授業に引用した岩下氏の作品について

大方の場合、まず右掲の絵（写真1）²⁾を提示し、この作品が、こよなく絵をかくことが好きな人によってかかれた絵であること、そして限りなく仏様のことが好きな人によってかかれた絵で

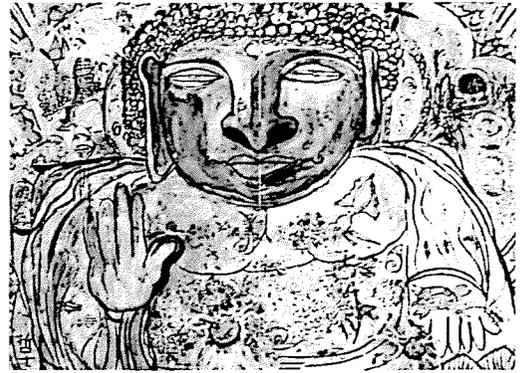


写真1：「祈り」F120号

あること、という二つの事実のみを知らせ、鑑賞者に感想を求め。以下、そのリアクションの一部である。「平和」「やすらぎ」「ほのほの」「やさしい」「祈り」「ねがい」「あたたかい」「安心」「豊か」「動物大好き」「みんな仲間」「つつまれる」「でっかい」「迫力」「いつくしみ」「ユーモア」「不気味」「見透かされているようでこわい」「森羅万象」「宇宙」などなどの感想が返されてくる。



写真2：「かんのんさま」109×79cm

2番目に紹介するのが、概ね、この「かんのんさま」の絵（写真2）³⁾である。画面には、おお

よそ200体を越える仏様が描き込まれ、緻密で繊細な絵になっている。後ほど詳述するが、氏の仏様に対する思い入れは、我々には想像もつかないほど強烈なものようである。



写真3：「お経をよむ」79×109cm

第3の絵(写真3)⁴⁾は、「坊主憎けりや袈裟まで憎し」という言い回しの対極にあるような表現。仏様が大好きだから、お坊さんも好きというところか。読経をする僧侶がいかにものどかにかつ表情豊かに表現されている。



写真4：「風神ちゃんと雷神ちゃん」F100号

京都、建仁寺の「風神雷神図」。いつか本物を見たかと思っていた。興奮した。長い時間ずっと見ていた。すごい。やっぱり顔が、いい顔してる。風神も雷神も。雷神なんかいまにも雷が鳴りそうな感じ。(岩下氏コメント⁵⁾)

大好きな「風神雷神図」を鑑賞した後、氏の思いの丈を絵に表したものである。彼はスケッチをしない。この絵の前に1時間も佇み、見続け、脳裏に焼き付け、帰宅後一気にかき上げたとのこと。

さて、通常の筆者の授業においては、まずこの4枚の絵を学生達に紹介する。先にも述べたように、その際の情報は、「こよなく絵をかくことが好きな人によってかかれた絵であること、そして限りなく仏様のことが好きな人によってかかれた絵であること」の二つの事実のみである。この鑑賞活動の後、「これらの絵がどんな人によってかかれたのか理解できる資料を紹介する」ということで、次節で詳述する「ビデオ資料」を提示する。

IV 岩下哲士氏のプロフィール

さて、てっちゃんこと岩下哲士氏のこと。折しも、京都嵯峨野にある常寂光寺で「第12回-仏といのち-岩下哲士展」を開催中(1998.10.10~10.25)の29才(1998.10現在)の青年画家である。今回、この個展会場で、初めて岩下氏ご本人、ご尊父及びご母堂にお目にかかることができた。

ところで、筆者が彼のことを初めて知ったのは、1994年秋たけなわの頃、夜のニュース番組「今日の出来事」⁶⁾を視聴していた際のことである。たまたま、当日、岩下氏の特集が組まれており、映像を通して彼の存在と彼の作品の一部を知ることとなった。

TV画面一杯に極彩色の絵が目飛び込んできた。それは衝撃的な出会いだったと言っても過言ではない。なぜなら、その絵は筆者の中で、瞬時にしてゴッホや北斎のみならず、筆者自身の表現の上に位置付くものだったからである。これまで、他者から絵の嗜好などを問われた際、たとえば、ピカソは言うまでもなく、ゴッホは好き、セザンヌもいい、エゴン・シーレやクリムトもまた素晴らしいなどと応え、安藤広重や葛飾北斎もなかなかであり、香月泰男や佐伯祐三などの展開も学ぶべき点が多く、奥田元宋、加山又造などの世界もまた魅力的であるなどと熱弁していた。それぞれに優れた作家達であり、彼らの手になる作品は筆者にとっても大きな価値を持っていた。そうではあるがそれらを差し置いて筆者自身の絵が一番好きだった。しかし、今は違う、それは岩下氏の絵に出会うまでのことだったと言わなければならない。多少、情意的な表現になるが、当日、筆者の目はTV画面に釘付けにされてしまった。単純明

快なインパクト。叙述能力を疑われそうであるが「すごい絵だ！」の一言しか吐けなかった。そしていわゆる「一目惚れ」という状態。これが岩下氏の絵に遭遇した時の偽らざる反応である。

主観的ではあるが岩下氏の作品には一切の妥協がない。さりとても悲壮感が漂っているわけではない。筆者はまた岩下氏ほど純粋な画家に出会ったことがない。まさしく絵が好きだから絵をかいている。かきたいものがあるからかいている。岩下氏にとって絵をかく営みは名声、富、地位など一切無縁のようである。だからだろうか、絵の中に媚びも衒いもない。気負いもなく純粋な魂の叫びともいえる迫力がある。こうしたことが多くの人たちの共感を集めるのだろう。老若男女の別なく大方の人を魅了する。

ところで、以下、岩下氏の人間像を明らかにするため特集の内容を、あえて再現しておくことにする。この特集は、櫻井良子キャスター（当時）の次のイントロで始まった。

脳に損傷を負ったある青年の創造する世界を特集します。脳の機能は左側が右半身と論理や言語、右側が左半身と創造性を司るとされています。青年の脳は右側の発育が止まっています。常識的に言いますとこの青年は芸術とは縁遠くなるはずです。青年の名前は通称てっちゃん。てっちゃんの世界を大阪読売テレビが取材しました。（櫻井キャスター）

このコメントの文脈から、この特集が脳の働きにかかわりのあるものということはあらかじめ推察できた。大脳生理学等の分野の発展が著しい昨今のこと、一見の価値ありと判断した所以である。映像はまず、岩下氏の散歩の様子を映しだした。この散歩中、「顔が可愛いね」と金魚に気を配る氏の様子をクローズアップし、次のようなナレーションがかぶせられていた。

じっと見つめ始めたらとまらないてっちゃん、命あるものすべてに目を輝かせます。鮮やかに色づき始めた京都嵯峨野。ここ（常寂光寺：京都市右京区）で、てっちゃんの個展、「仏といのち」が開かれました。18才の時から数えてもう8回目です。大胆で力強いてっちゃんの絵に見る人も思わず足を止めます。（男性ナレーター）

ここで、個展会場に並べられている様々な岩下氏の絵がTV画面に次々と映し出された。どの絵も大胆な構図と色彩に溢れる魅力的なものばかりであった。

てっちゃんの絵は花や動物など生き物が殆ど、でも一番多いのは、小さい頃から好きだった仏様の絵です。（男性ナレーター）

TV画面には仏様の絵が映し出されている。

どうして、仏さんっていいなと思うの。（男性ナレーター）

やっぱり、やさしいからかなあ。小さいときに見たときに、画用紙にあの大きな大仏が入らないゆうて泣いたときあったもん。（岩下氏談）

岩下氏の幼少の頃のスナップ写真を映し出ししながら、その映像にかぶせて次のナレーションが流された。

てっちゃんこと岩下哲士さんは、1才の時、突然、原因不明の高熱と痙攣に襲われました。病名は急性小児片麻痺。その影響で絵や音楽など創作的な感覚を持つとされる右の脳は全く動かなくなったのです。左半身にも麻痺が残る両目も視野の左半分は暗闇の状態。しかし、信じられないほどの集中力で取り組むものがありました。それが絵です。（男性ナレーター）

会話がね、絵になるんですよ。山かくでしょ。あっ、山行っただの。どこの山かな。そしたら鳥居かいて、あっ、神社。じゃ、そこに神社があったの。で、バスがあつて。あっ、バスに乗っていったの。そういう会話がね、いわゆるこの子の伝達、私に対する伝達方法でした。（岩下氏ご母堂談）

画面は散歩をする岩下氏の様子。

てっちゃんは毎日散歩をします。歩いているといろんな生き物と出会えるからです。（男性ナレーター）

散歩の途中で岩下氏は、「すごい見ちゃったよ」と、大好きな鶏頭の花を見つける。ためつつがめつ鶏頭の花を見る、愛でる。ついには、鶏頭

の持ち主に譲ってほしいとの要請。「まえはもつときれいやったんやけどねえ〜」と、そう簡単には譲れない持ち主の抗弁。「いや、いまもきれい」と、どうしてもほしい岩下氏のたたみかけ。あれこれのやりとりの末、「そこをなんとか」と、結局これを分けてもらうことになる。岩下氏の粘り勝ちである。やっとの思いで手に入れた大好きな鶏頭の花。創作意欲は十分。絵に取りかかる。花のひだのひとつひとつを、克明に、詳細に、緻密にかき込む。絵をかく途中、ご母堂が、花についた虫を発見。「ワー！虫いっぱいほうてるわ。哲ちゃん、どうしょ。どうしょ」と、ご母堂は困惑ひとしきり。「虫もかわいい」と、岩下氏は意に介せず。「いや、可愛いけど、ちょっと……シューしとこうか」「あかん。ちょっとそんな、こんなきれいな花に」「すみませんあ」と、なんともあたたかい母子のやりとりではある。彼とご母堂のこれが真骨頂、等倍の実像であろう。(略)



写真57)：「千手観音」79×109cm

絵をかくことが楽しくてしょうがないでっちゃん。でもつらいこともいっぱいありました。(男性ナレーター)

みんなは両手が使えるのに僕だけなんで片一方だけしか使えないのかなと思うこともあった。何回もあった。(岩下氏談)

自分がすごく好きなことをね、一生懸命して、で、そういうのをまた皆さんに見ていただくなんて、非常に贅沢、すごく幸せな子じゃないかなと思う。(岩下氏ご母堂談)

でっちゃんのまわりにはいつも愛が溢れています。

そして、でっちゃん自身も命あるものに対する優しさに溢れています。(男性ナレーター)

仏さんの絵やら、生き物とか、お花とか、動物やら、そんなんをたくさんかいていきたいなと思う。絵はやめたくない。ずっとかいていきたい。絵の次に好きなもの？寝ること。(岩下氏談)

でっちゃんの夢の中を覗いてみたい。主治医によりますと、右脳の損傷の時期が、脳が発達しようとする幼い段階だったため、逆に左脳が発達して右脳をカバーしているというのですね。(保坂キャスター)

でっちゃんがね、自分が感動したことを一切ためらわずに言ったりかいたりしますね、それはためらうというのが本来右の脳の機能の一つだからなんて言われているんですね。でも、右も左も関係なく、でっちゃんが好きなことにのめり込んでいってそれに夢中になって愛を感じてかくという姿がいいですね。(櫻井キャスター)

以上、この特集は、岩下氏の日常生活の様子や作品等を映像で示しつつ、番組制作サイドのコメント、岩下氏自身のコメント及び岩下氏のご母堂のコメント等を織り交ぜ、単に岩下氏の作品紹介ということにとどまるのではなく、岩下氏の間接像に肉迫しつつ、最終的には左脳が右脳の代替機能を果たす可能性を示し、そのメカニズムの不思議、人間の無限の可能性を確認しようとしたものだったと筆者は理解している。そうした意味で説得力のある特集だったと評価している。

ただ、画竜点睛を欠くということになるのか、この特集の櫻井キャスターの締めくくりコメントには油断があった。すなわち「ためらい」に関する指摘である。これは不適切と言わざるを得ない。なぜなら、この発言の本意がどこにあるのか不明瞭だからである。これが櫻井氏個人の見解なのか、あるいはニュース原稿を作成したスタッフの見識なのか、脳生理学サイドからの示唆なのか、どのレベルから発されたものであるか筆者は知る由もない。また今更詮索しても致し方ないだろう。しかし、この番組の制作意図から推理すれば、やはりズレた発言と指摘をせざるを得ない。すなわち、このプログラムは「右脳の損傷の時期が、脳が発達しようとする幼い段階だったため、逆に左脳が

発達して右脳をカバーしている」という主治医の所見に基づき、右脳の損傷を左脳が代替する可能性を示そうとしたはずのものだからである。この論理的破綻は否定できないだろう。のみならず、ここでは紙面の関係で割愛するが、筆者が収集した岩下氏に関する記述・記録等から総合的に判断するなら、やはりこの見解は否定せざるを得ない。鶏頭の花の要請は限りなく鶏頭が好きという純粋な気持ちの発露であり、これはおそらくためらいの有無の問題ではない。

V 3H美術教育と岩下哲士氏

さて、ここまで述べてきたことを前提にしながら、ここでは3Hの関係図式と岩下氏の在り方・生き方が整合するものであることを明らかにし、現下の主張「3H美術教育のススメ」の妥当性を示しておきたい。

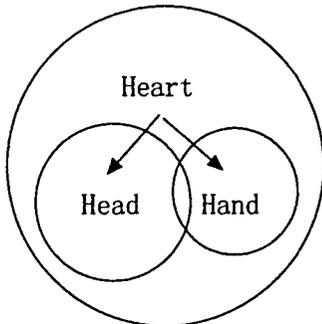


図-1

まず、「3H美術教育のススメ」について概略を述べておく。3Hは、Heart, Head, Handであり、この3者の関係は、図-1の通りである。そして、この図式を背景にした美術教育をつくりあげていくプロセスでこそ、従前から叫ばれ、しかし、なおかつ十分には達成されていない「美術による人間形成」の具体化が図られることを指摘するものである。あるいは、誤解を恐れず言うなら「3H (Heart, Head, Hand) 美術教育のススメ」の図式は「好きこそものの上手」の図式ともオーバーラップするものであり、図中の「一方矢印」はそのことを示すものである。さらに、この図式は教育における不易の課題とも言える「自己教育(学習)力育成」の図式とも重なる。

ところで、Head(頭)とHand(手)をHeart

(心)に内包させたのは、Heartの優先性を示したものであり、Hand(手)の面積が最小であるのは、現段階における我が国の教育、とりわけ美術教育における技術(技能)優先の教科認識やマニュアル化された指導法が重宝がられる実態への警鐘であり、「肯定命令プログラム⁸⁾」「HOWの教育⁹⁾」への挑戦と言っても過言ではない。そして、Heart(心)を最大にしたのは、「ワクワクドキドキめだかの学校」のあまりに少ない現実、「ヒヤヒヤハラハラすずめの学校」のあまりに多い現実への指摘である。こうした文脈において、HeartからHead及びHandに向かう、「一方矢印」は、Heart(感性, 感受性, 感覚, 感情, 関心, 意欲等)の活性化が、おのずとHead(知性, 智慧, 知識, 発想, 構想等)とHand(技能, 技術, 技法の情報等)の活性に連動することを想定している。このことが自己教育(学習)力の図式との整合を指摘する所以でもある。なお、先にあえて「一方矢印」としたのは、図-1の内容が具現され、これがさらに発展・展開した図式としては両方矢印の可能性も考えられる。否、最終的にはそうした展開こそ求められなければならないと考えているからである。

さて以上のことを踏まえて、以下、岩下氏と3Hの図式との整合性・重複性を、氏にかかわる幾つかの事実を引用しつつ、より鮮明にしておきたい。まず、最初の資料は、彼が高校時代に自らの進路を考えた際、周囲の人たちに自分の気持ちを理解してもらいたいと願いを込めて次のような作文¹⁰⁾を書いている。

ぼくのゆめ

岩下哲士

ぼくは、いつかお寺にいった、おきょうをよむれんしゅうとか、ひとがきたらざぶとんを、だしてあげたり、お茶をいれてあげたり花のいれかえをしようとおもっています。

ぼくは、寺にいけたら、たびというのと、黒のきものをきたいです。仏さまのおられるところで、絵をかいて、いきたいのです。

それがぼくのゆめです。とまりでもいいし、かよってもいいなあとおもっています。仏さまを、年に一回みかいてあげるのも自分のしごとにしてみたいとかんがえています。お寺にいった、どんどんしゅぎょうをつんでいくため、今もがんばっています、食じも、ごはんも、うめぼしだけでもいいとおもいます。

自分でも、カレーとかステーキなんて、ぜいたくをいってられないと思います。おかゆでもいい、なにをたべてもびょうきにならないように自分のからだをきたえて、りっぱなおとなになろうと思っています。今は、よく妙法寺にいて、おほうさんのはなしをきいています。

岩下氏の切実な思い・願いが伝わってくる文章である。仏様のことをどれほど好きかを理解できる。また、「仏さまのおられるところで、絵をかいていきたいのです」との意思表示もみられる。「絵がすき」という思いについては、次の一文もそれをよく示している。

ほくは、絵をかくときがものすごくたのしいです。いろをぬっているときなんかは、おしりをふりながら音楽にあわせて、からだをうごかしながらかくことも、あります。(略)

絵をかいているときが一番たのしいし、むちゅうになって、いるのでほくのすきなコーヒーをいれてもらってもコップにも手がいかなくなっているときもあります。絵ができたときには、冷たくなっています。てっちゃんによばれても、うしろをふりむくことができないぐらいしんげんに紙のほうにむいています。うしろをふりむいたら、なにをかいていたかということもわすれてしまいたいそうなので、なにもしゃべりかけないようにしてもらいたいときもあります。絵のかきおわったあとなんかは、いびきをかいてねたりするときもあります。絵をかいたあとそのぐらいつかれているのかなとおもいます。¹¹⁾

この文面からも岩下氏の絵をかくこと、かきつづけることへの意思が並大抵のものでないことは理解できる。「12歳から24歳までの作品数は、千点を超えるという¹²⁾」という事実もある。絵が好きだからこそ、結果として1,000枚もの絵がかけたのであり、1,000枚もかき重ねていくうちには否が応でも技術・技能は自ずと獲得できるだろう。岩下氏のこうした展開はまさに3Hの図式そのものであり、この事実を強力な裏付け資料として引用する所以である。

VI 学習材の視点からみた岩下氏の意味

1 「表現」の学習材としての可能性

① 表現の指導の現状

このことについて、本稿では多くの紙面を割くことなく正鵠を射た表現を考えた。その結果、

多少乱暴ではあるが次のようにまとめた。すなわち、我が国において「美術教育論」は百家争鳴状況、極めてにぎやか。しかし「酒井式描画指導法」の類書が、引きも切らずに書店に並び着実に棚から消えていく現実こそが実態。

② 表現の意味の理解につながる学習材

バックは暗いグレーで塗り込められている。黒い縁取りの施された真っ赤な手が画面一杯に配されている。

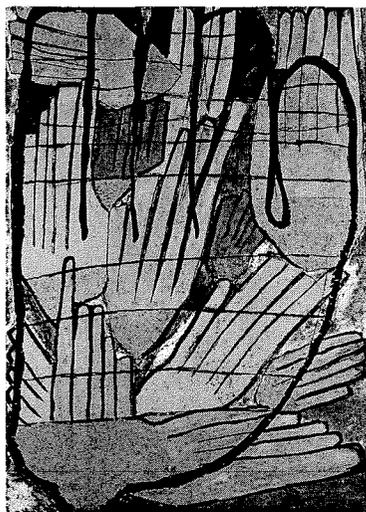


写真6¹³⁾：「赤い手」107×77cm

僕の左手は不自由なので、仏様の前で上手に手をあわせることができない。なんでできないのかと、泣いたこともあった。悲しくて、「赤い手」を描いた。「これだけ手があったらな、僕なんでもできるのにな」「哲ちゃん、もう心のなかでは、誰よりも上手に手をあわせているよ」

岩下氏的心情を垣間見ることの出来るような作品である。見るものに迫ってくるほどのインパクトを持った絵である。おそらく岩下氏は自分の悔しき、苦しき、つらさなどをストレートに画面に吐露したのであろう。表現がなんのため、そして誰のためにあるものかを、あらためて考えさせてくれる作品である。なお、この記録は、同時にご母堂の素晴らしき、そしてご母堂あったればその今日の岩下氏があるという側面を確認させる資料ともなっている。

好きだから絵をかく。好きなものの絵をかく。心底好きだから思い入れも尋常ではない。この画

面のサイズは109 \times 77 \times 。



写真7¹⁴⁾：「ジバンシー」109 \times 77cm

この大画面の右上隅に某社缶コーヒー1本、右下に角砂糖4個、スプーン1個、ミルク入れ1個が申し訳のように描き込まれているが、おおむねジバンシーの模様で埋め尽くされている。この絵はジバンシーの模様が好きだからかいたとのこと。その思いがストレートに伝わってくる。自分の好きなものを好きなようにかく。単純明快、意味明瞭である。

ところで、これらの作品は、筆者に対して「子どもにとっての表現の意味の再考・再検討」を迫るものであり、同時に、かつての指導内容や方法についての反省を迫るものでもあった。おそらく、かつての筆者であれば、子ども達がこうした絵を提出してきた時には、彼らが自信喪失に陥るかもしれないとか、主体性・自主性の芽生えを阻害するかもしれないなどのことを顧みることもなく、「ちょっと待て。絵というのはそんなものではない。ちゃんと構図というのがあってね、3つくらいのカップを、前と中間と後ろにというように重なりなどを考えながらかくもんだ」などという「助言」という名目の「指示」をしていたに違いない。そうしたナンセンスを反省させられた作品であり、子どもサイドからみた場合「絵は自分の思い通りにかくことが一番」ということへの示唆を含んでいる。

③ 表現姿勢の理解につながる学習材

このことについては、岩下氏の紹介する増田先生¹⁵⁾のエピソードを取り上げておくことにする。増田先生は、岩下氏に「下手上手」という言葉を示唆している。

みんなは僕の絵を見て、変わった絵だという。僕は、そのときの自分の気持ちをイメージして、そのままを描いているだけ。

増田先生は「下手上手」という言葉を教えてくれた。「上手でも心のない絵やなくて、やっぱり、下手でも心のある絵がええな」この言葉が、僕は大好き。

「下手上手」という言葉が、ともかくも岩下氏を表現上のなんらかの呪縛から解き放ったであろうことは氏のコメントからも了解される。しかし、この「下手上手」はそれだけではない。岩下氏の絵と氏の在り方・生き方とも相俟って表現に抵抗感を持つ多くの人達をその呪縛から解く力も持っている。1998（平成10）年6月5日、筆者は広島市立亀山南小学校の第1学年から第6学年までの児童300名余を対象に全校図画工作「図画工作ってなんだろう」を実施させていただく機会を得た。この全校授業の冒頭、「いまからすごい絵をみせるよ」「『下手上手』のすごい絵を見せるよ」ということで、本小稿冒頭に引用した「祈り（写真1）」を提示した。子ども達から大きな反響があり、この1枚の絵からそれぞれになんらかのこころを感じ取ってくれたという手応えを感じた。後日、筆者への子ども達からのメッセージを学級担任の先生が送付して下さった。様々なメッセージがあった。とりわけ多かったのが「絵をかくときに上手にかくということよりも、『下手上手が大切』ということがよくわかりました。今度からはそういう気持ちでがんばります」など「下手上手」の意味を正しく受け止めてくれたと思われる記述が散見された。筆者が子ども達にこの言葉を提起した意味を正しく受け止めてくれたと判断する根拠である。「下手上手」はけだし名言である。美術教育の中において子ども達にも分かる「具体的な言葉」として大切にしていきたい「文言」の一つである。なお、ここで増田先生にかかわるエピソードをもう一つ紹介しておく。過日、岩下氏のご母堂と電話でお話しした際、増田先生のことには話が及び、絵をかくことについて、常々、「みること、みる

こと、ともかくみることだよ。てっちゃん」と、観察の大切さをおっしゃっていたということであった。示唆に富んだ指摘である。

2 「鑑賞」の学習材としての可能性

① 「鑑賞の指導」の現状

「表現と鑑賞は表裏一体。貴校での鑑賞の授業が子ども達の作品にどのように反映したか具体的な事例をうかがいたい」とは、広島大学附属小学校の公開研究会における研究協議会の際、授業者に対して提出された幾つかの質問のうちのひとつである。授業研究の場において当該授業についての成果を様々な角度から検討するのは当然のことである。そうした意味ではどんな質問がでもおかしくはない。しかし、この鑑賞の指導に関する質問に関しては、質問者の「鑑賞の指導」に関する解釈に問題はなかったのかどうかということも同時に気掛かりである。たとえば、はたして、鑑賞の授業の成果が「作品にどのように反映」したかが必要不可欠条件として毎回問われなければならないものなのか。あるいは「表裏一体」ということをどのように把握しているのか。結局、「表裏一体」ということを「表現のための鑑賞」ととらえているのではないのか。鑑賞はなんのため、誰のためと考えているのか等々、この質問者の鑑賞の指導への認識に関する疑問が残っている。ともあれ、こうした質問の発生は、鑑賞の指導の実態を反映したものにとらえている。

② 「鑑賞の指導」とは

日々の授業において、子どもたちに「なに」を獲得させたかをきめ細かく点検・評価していくことは教師の仕事として不可欠である。しかし、こと鑑賞の授業において、その成果が表現に反映することを求め、それを成果とするような短絡的な授業評価が実施された場合、鑑賞の指導の在り方そのものが歪められてしまう危険性がある。たとえば、スーラを鑑賞した後の子どもたちの作品の多くが「点描」で表現され、あるいは、ルオーをみて、子どもたちの作品の幾つかに「黒いふちどり」が出現し、ダリを見た後は「不可思議なもの」が絵のなかに表されていたという現象をとらえて、鑑賞の指導の好ましい成果がみられたなどという判断は誰もしないはずである。ナンセンスであることはあらためて言うまでもない。しかし、

「表現と鑑賞は表裏一体」というフレーズを引き合いに出し、「目に見える成果」で安心を得ようとする人々の多くは、結果的には鑑賞の指導の在り方をこのようなナンセンスのレベルでとらえていると言わざるを得ない。「ひも付き鑑賞（表現に直結する鑑賞）」「押し付け鑑賞（ピカソは偉大な人、彼の絵は素晴らしい、だから君もその素晴らしさを認めろ）」などの揶揄を込めた指摘が存在するのもゆえなきことではない。

③ 「鑑賞の教育」と「鑑賞による教育」

ところで、あらためて「鑑賞の指導」を二つの視点からとらえ直してみることにする。「鑑賞の教育」と「鑑賞による教育」である。美術教育は「美術の教育（Art Education）」と「美術による教育（Education through Art）」を指向する。この図式の中で「鑑賞の指導」も、おのずと「鑑賞の教育」と「鑑賞による教育」が要求される。誤解を恐れず極論するなら、前者は、知的側面から作品を味わう過程で鑑賞の姿勢や方法を身に付けさせることが主眼となる。「鑑賞による教育」は、極めて感覚的にせよ、作品を見ることや味わうことを通して人としての在り方や生き方を獲得させることが先行したねらいとなる。たとえば、ピカソのゲルニカについて、この作品の制作された時代背景等を十分に学習した上で、なんらかの根拠をもち、その「好き嫌い」や作品の意味を批判的に考えていくなどのことは「鑑賞の教育」である。一方、そうした背景を一切持たない状態での見方も許容され、「ピカソは色や形がケバイからチョー（超）嫌だ」という極めて感覚的な主張も、とりあえずは容認する。これが「鑑賞による教育」の一側面であり、むしろ「自分はいやだ」という「気持ち」を素直に表出できたことを尊重する。これが「押し付け鑑賞」の対極にある「丸ごと鑑賞」といわれる所以である。こうした視点から「鑑賞の指導」の在り方を考えるとき、「鑑賞即表現」という直接的反映のみが期待されるべきでないことも首肯されるのではないのか。

④ 「鑑賞の指導」における岩下氏の意味

岩下氏の事例を「鑑賞の教育」と「鑑賞による教育」の視点からとらえなおしてみたい。まず、「鑑賞の教育」という視点からとらえるとき、本小稿の前半部で紹介した写真4の「風神ちゃんと雷神ちゃん」は、極めて有効なエピソードと言え

るかも知れない。なぜなら、この作品は、先にも紹介したように岩下氏が「風神雷神図」を一時間も見つめ続けた後につくりあげた作品だからである。見ることは分かること。分かるためには、見ること、観ること、視ること。こうした、真摯にみることの大切さを理解させるには「風神ちゃんと雷神ちゃんは」はひとつの可能性を持った作品といえるのではないだろうか。

次に、「鑑賞による教育」の視点から岩下氏のことをとらえてみたい。次の文面は小学校6年生に対して岩下氏の事例を引用した授業を実施した教諭からの報告である。「6年生全員にみせたところ深く生き方に感動すると共に描画に意欲をもってくれたようです。こういう学習もどんどんとり入れ卒業へ向けていきおいをつけていきたいと思っております」との文面。冒頭の大学生達の反応とも相俟って、ここでも岩下氏の事例がかなり深いレベルで受け止められている。鑑賞の指導も「在り方・生き方」の学びにつながるものでなくては意味が半減する。こうした視点からも岩下氏の事例は、極めて大きな可能性を秘めた学習材といえることができる。筆者が教科書への掲載をさえも主張する所以であり、今後とも題材開発を継続していきたいと考えている。

VII むすび

本小稿は、岩下哲士氏の在り方・生き方及び作品に考察を加え、第1に、筆者の主張「3H美術教育のススメ」の妥当性を示すことであった。第2に、「生きる力」の形成に向かう美術教育という理念を確認するとき、岩下氏にかかわるすべてのことが有効な学習材であることを明らかにすることであった。そして、究極的には不遜な言い方もかもしれないが、歪んだ我が国の美術教育の現状を是正していく一石になればとの思いをもってしたためたものである。

最後に、「ふくろうの親子（写真8）」の絵を紹介して本小稿を閉じる。岩下氏の人間性を一層深く理解できる作品と言えるかも知れない。読者諸賢の解釈に委ねたい。なお本作品には「小さい方がおかあさん、ぼくが足をふんばってまもってあげている」というキャプションが付されていた。



写真8¹⁶⁾：「ふくろうの親子」109×77cm

参考及び引用文献等

- 1) 日本テレビ系の夜のニュース番組「今日の出来事」1995年10月31日の特集
- 2) 岩下哲士「20歳の個展」講談社、1990年、pp100-101
- 3) 岩下哲士「絵がたり」NTT出版、1995年、p17
- 4) 岩下哲士「岩下哲士のイメージの世界」日本放送出版協会、1994年、p68
- 5) 前掲書3) pp.10-12
- 6) 前掲1) の番組
- 7) 前掲書3) pp.26-27
- 8) 江崎玲於奈「既成のプログラムを破れ」週間朝日：増刊、1992年、pp66-68
- 9) 糸川英夫「復活の超発想」1992年、徳間書店
- 10) 前掲書4) p119
- 11) 前掲書2) p49
- 12) 前掲書4) p121
- 13) 前掲書3) p25
- 14) 前掲書4) p80
- 15) 前掲書2) p57, p62, 増田正三郎、行動美術協会会員
- 16) 前掲書4) p8